

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

— 下北沢と成城に関する 70 年間の変遷と

フィールドワークを踏まえた提案 —

境 新 一

1. はじめに

筆者は日頃からフィールドワークを用いた、まち・商店街の調査・研究、産学公連携活動、地域活性化の提案、アートとビジネスを融合した価値創造、総合的なプロデュースを行ってきた。今回は、教育・研究において日頃から関わりの深い世田谷区小田急線沿線の駅である下北沢、成城学園前（以下、成城と略記する）ならびにその周辺をとりあげて、当該地域における企業・商店街を中心に、その発展の推移を複数の素材と情報から検証することを目的とする。様々な資料を起点に、人間が過去から現在までどのようにまちや商店街を創造し、今後このまちに新たな物語を創造できるか考えたい。言い換えると、本調査・研究を通して創造性のあるまち・商店街づくりを探求することとした。

2. 分析対象ならびに分析方法

2-1 創造・創造性の定義

創造とはもともとラテン語の *Cretatus*, *Creo* に起源がある。英語で創造の意味である *Creative* という言葉が用いられるようになったのは、14 世紀初期にイギリスの詩人 ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1343 年頃-1400 年) が「神の創造」という言葉を使ったのがはじめとされている。しかし、人間行為としてのその現代的意味は、啓蒙主義の後まで現れ

なかったとされる。現在では創造性とは、新奇で独自のかつ生産的な発想を考え出すことまたその能力を指す(OED, 2010)。

2-2 調査・研究の目的

本調査・研究の目的は既へのべたように、小田急線沿線にある下北沢、成城学園前ならびにその周辺地域における企業・商店街を中心に、その発展の推移を検証することである。

特に取り上げる期間としては、第二次世界大戦後である1945年～2020年の約70年余間の推移を反映した様々な資料を起点に、人間が過去から現在までどのようにまちや商店街を創造し、今後このまちに新たな物語を創造できるか否か考えたい。

ここで「まち」とは、(1)人が多く集まり住んでいる町 (2)沿道に商店が並んだ街 その両方を指す。人間は時代に沿って建物や道路、環境面、歴史文化などを保護し改善することによってさらに住みやすい「まち」を創造してきた(境, 2018a; 2018b)。

2-3 分析対象・分析方法

東京の世田谷には、「烏山地域」「北沢地域」「砧地域」「世田谷地域」「玉川地域」5つの地域がある。今回の調査・研究における分析対象は、世田谷東部：北沢地域にある「下北沢」と馴染み深い世田谷西部：砧地域にある「成城」という2つのまちを取りあげる。両地域は、電車での時間距離(急行に乗車した場合)は10分程度と近いものの、地域特性では多々差異がみられる。

分析方法としては、様々な資料のなかで、住宅地図／文献、写真、フィールドワーク、インタビューを総合的に使用した検証を行うこととした。そして、調査・研究を行う学生を担当地域で分け、下北沢グループと成城グループに予め組織化した。

図表 1 東京都世田谷区の5地域と下北沢／成城の位置づけ



まず、住宅地図をもとに、フィールドワークの場所候補を定め、当時を反映した写真資料をもとに、そこに写る風景と内容を考察する。その際、まち・商店街に関する評価項目と評価基準を予め決めて絞り込む。次に、実際に現場をフィールドワークし、観察すると同時にその変化を対照させ検証する。第三に当該地域に縁の深い事業者にインタビューを行った。最後に、まち・商店街に関する評価項目と評価基準にそって評価し、可能であれば提言をまとめる。

上記のうち、さらに具体的な資料や情報について記すことにしたい。

まず、住宅地図／文献についてである。今回、入手できる最も古い地図は以下である。

- ・「住宅協会編・東京都全住宅案内図張 世田谷区・東部／西部」(1962年)。

ただし、その後の調査で、居宅(個人名)の事実関係から、当該地図作成の調査時点は1958年と推定されることが判明した。本調査・研究はこれをもとづき、同じ撮影場所を現在と比較検証するためフィールドワークを実施することにした。東部版には下北沢周辺が、西部版には成城周辺が掲載されており、当時の個人の居宅、事業者の所在地の詳細な位置情報がわかる。また、地域特性については、以下の文献が参考となる。

- ・世田谷区編『ふるさと世田谷を語る 代田・北沢・代沢・大原・羽根木』(2003年)。
- ・世田谷区編『ふるさと世田谷を語る 祖師谷・成城・喜多見』(2003年)。
次に、写真資料についてである。ここでは次の資料が該当する。
- ・オリバー・オースティン博士* (Dr. Oliver L. Austin) の撮影したカラー写真(1945~1950, 下北沢周辺に限定すると18枚が相当)。*詳細後述。
「北沢川文化遺産保存の会編/焼け遺ったまち下北沢の戦後アルバム 増補改訂版」(2018年10月)。
- ・世田谷区郷土資料館「写真で見る高度成長期の世田谷1955-64」DVD版(2016年)。
- ・成城学園教育研究所の成城周辺に関する所蔵写真(1945年以降)。
- ・成城大学卒業記念アルバム(成城学園教育研究所所蔵, 1962年~1965年)。
- ・坂上正一『発掘写真で訪ねる 世田谷区古地図散歩~明治・大正・昭和の街角~』(フォト・パブリッシング, 2019年)

オースティン博士の日本滞在時に撮影したカラー写真(1945-1950)の現物は、University of Florida, The Institute on World War II and the Human Experience(戦争研究所)に所蔵されている。ただし今回は、「北沢川文化遺産保存の会編/焼け遺ったまち下北沢の戦後アルバム 増補改訂版」(上記)に基づいて調査した。オースティン博士の写真のコレクションは、彼の死後、息子であるトニー・オースティン氏から寄贈を受けた米国フロリダ州立大学戦争研究所(アニカ・カルヴァー博士)が管理していた。北沢

川文化遺産保存の会の資料は、戦後70周年を記念してデジタル化した写真現物について「北沢川文化遺産保存の会」が、許諾を得てQRコード付きで地域の歴史や懐かしい風景絵画とともに編集したものである。モノクロ写真が一般的であった当時、カラー写真は貴重かつ情報量が多く有益である（北沢川文化遺産保存の会、2018b）。

第三に、フィールドワークについてである。元来、フィールドワーク（field work）とは、調査対象について学術研究をする際に、そのテーマに即した場所・現場を実際に訪れ、その対象を直接観察し、関係者には聞き取り調査やアンケート調査を行い、現場で史料・資料の採取を行うなど、学術的に客観的な成果を挙げるための調査技法である。

フィールドワークの実施対象は多岐にわたる。フィールドワークを重視する学問分野としては、人文科学では、社会学、民俗学、文化人類学（社会人類学）、歴史学、考古学、人文地理学などであり、自然科学では、地質学、生物学、地形学、自然地理学、生態学、人類学などが相当する。人文科学における直接の対象は個人、集団、社会、民族、あるいは国家であり、自然科学における対象は自然物などである（佐藤、1992）。

今日、私たちは知識や情報を多量に入手する、記憶する、あるいは、吸収するだけでは十分とはいえない。新たな知識や情報ならば、現場でなくともインターネット、SNSなどの社会ネットワークの手段を駆使していくだけでも獲得できる。問題となるのは、得られた知識や情報が次々に更新されて鮮度を失い、知識を保持する意義自体が低下していることである。むしろ、自ら知識や情報を集め、新たな知の枠組み、システムを創り出し、新たな機能や価値を組み込んでいくことこそが必要である。その意味で、知識は現場での経験を通して獲得した技術、手法、情報とともに、様々な資源、特に人的資源・社会関係資本のネットワークを含むことになる（境、2017）。

以上をふまえ、今回まず下北沢周辺については、上記のオースティン博

士写真ならびに「北沢川文化遺産保存の会編／焼け遣ったまち下北沢の戦後アルバム 増補改訂版」にもとづき、場所が特定できる。下北沢では、「一番街商店街」「下北沢東会」「下北沢南口商店街」「しもきた商店街」を中心にまちを歩き、時間の推移のなかで変わったもの、変わらないものなどを検証した。一方、成城周辺については、成城学園教育研究所所蔵の写真、ならびに、成城大学卒業記念アルバムにもとづいてまちを歩き、新旧を対照することにした。

下北沢については、上記のオースティン博士の写真と住宅図張をもとに撮影されたスポットを中心にまちを歩き、その新旧対照（1962年と2018年）を行い、共通点と相違点を検証する。

一方、成城についても、下北沢と同様に写真と図帳をもとに、同じ撮影場所を比較した。

最後に、インタビューならびにまち・商店街の評価／提案についてである。これは当該地域に縁のある個人・事業者に対して、住宅地図／文献、写真、フィールドワークによって可視化された情報、それでも可視化されないまちの情景や時代の空気感に関する情報を裏付ける、あるいは補完するために実施した。そしてまち・商店街の評価▶提案については、境ゼミ学生（2018年当時、3年次生20人）を予め組織化しておいた下北沢グループ（11人）、成城グループ（9人）で評価を総合し、かつ、見つかった課題に対する解決策の提案を検討させた。

なお、本調査・研究は、「第4回北沢川文化遺産保存の会研究大会・下北沢の戦後を語る」（2018年8月4日、世田谷カトリック教会）、第27回経営学合同ゼミナール研究発表大会（2018年9月2日～4日、静岡県伊東市観光会館別館、優秀賞受賞）、下北沢大学研究発表（2018年9月23日、北沢総合支所）において境ゼミは複数回発表の機会を得た。

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

写真1 フィールドワーク風景



(注) 筆者撮影。2018年7月。

写真2 フィールドワーク風景
＝オースティン写真03



(注) 同左。

写真3 北沢川文化遺産保存の会研究大会①



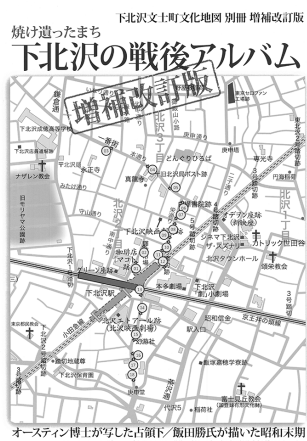
(注) 筆者撮影。2018年8月。

写真4 北沢川文化遺産保存の会研究大会②



(注) 木村孝氏撮影。2018年8月。

図表2 北沢川文化遺産保存の会編
／下北沢の戦後アルバム 増補改訂版



(注) 2018年10月発行。

写真5 フィールドワーク風景 木村孝氏



(注) 2018年7月 筆者撮影。

2-4 まち・商店街の評価

既に記したように、本調査・研究では、住宅地図／文献、写真、フィールドワーク、インタビューを分析した上で、まち・商店街を評価することになる。その際、評価項目は上記4つの分析ツールから、評価可能な項目を検討した結果、「建物」「交通」「商業店舗の増減」「外観からわかる情報」「グローバル化」「防犯・防災」「緑・環境」「医療・福祉」の8項目(A~H)とした。評価は5段階で、1は達成水準が高い(最高)、5は達成水準が低い(最低)とした。

3. 文献、写真、フィールドワーク、インタビューの総括

3-1 オリバー・オースティン博士

オリバー・オースティン博士 (Dr. Oliver L. Austin, 1903年5月24日-1988年12月31日) は、1903年米国ニューヨーク州に生まれ、ハーバード大学にて博士号を取得した。彼は第二次世界大戦後、日本がGHQの占領下にある中、1946年4月から1949年12月まで米国天然資源局 (the Natural Resources Section) の野生生物部署の代表として、占領下の日本で狩猟法の改善や動物保護区の設定など野生動物の保護に尽力した。そして戦後間もない駐留中の米国人の生活や東京や地方の生活、日本の街や人々の生活の様子を多数撮影し、全国で1,000枚以上の鮮明なカラーライドが残された。彼の官舎は下北沢から近い代々木大山町(渋谷区)にあり、下北沢に関するカラー写真も18枚残されていることは既に述べた通りである。

3-2 小田急電鉄との連携活動

小田急電鉄(株)(以下、小田急電鉄、小田急とも略記)と境ゼミは2018年3月、10・11月に地域連携活動(コラボレーション)を行った。その準備は2017年夏から始まった。

まず、小田急電鉄・成城学園前管区(管区長兼駅長:鈴木真一氏)は2018

創造性のある まち・商店街づくりの追求

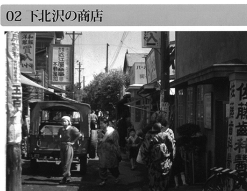
写真6 オースティン博士の撮影した下北沢 駅周辺写真01～09 1945～1950年



01 風月堂
北1駅前から北方向(「近江屋通り」現・カルヂのビル) 両面右側の数層なガラスが「下北沢駅前食品市場」の名称「ヤミ市」も入っている
今ピーコックのあるビルの場所には、この風月堂(菓子)から肉に向かって、(花弘(生花))、(小清水(喫茶))、福徳堂(薬物)という店が並んでいた。KK



Oliver L. Austin, Jr., "Takemoto". The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed October 16, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/781>



02 下北沢の商店
北1駅前通り(「近江屋通り」現・福徳堂行のビル) 赤いジープはオースティン博士の愛車で、米国ワイリスオーパーランド(足利(石川)の民宅を有する)とである



Oliver L. Austin, Jr., "Shinkaiyama store". The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed October 16, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/778>

03 瀬戸物屋(原タイトルによる)



本通り(現一番街)「宮田家具店」両面右を見たと、消火栓がすでに地中に埋め込まれていたことがわかる
宮田家具店の跡地を狭んでの隣は「きくや」という家庭館で、よく竹に「でん」した炭物行であった



Oliver L. Austin, Jr., "Pottery store". The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed October 16, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/780>

04 下北沢の商業地区・I



本通り(現一番街)正面奥が写真03の「宮田家具店」この通りは「すすみ通り」とも呼ばれ、未舗装の道路の両側に立つ建物はスズランの花を植えている。この建物の奥には、ここが戦前からの繁華であったことを示している。写っている建物の中にはリフォームされているものもある



Oliver L. Austin, Jr., "Shinkaiyama shopping district". The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed October 16, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/779>

05 台所用品店(原タイトルによる)



本通り(現一番街)「稲毛屋金物店」写真03の宮田家具店をきくやが、売れるものなら何でも扱っていた時代で、店先はすべておきますれば売れる時代だったといふ



Oliver L. Austin, Jr., "Kitchenware store". The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed October 16, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/780>

06 無題(「金魚店」)



本通り(現一番街)最北端・本通りの手前 突当りが「直造」工業は、この後茶沢通り沿いに移転した



Oliver L. Austin, Jr., "The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed October 16, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/815>

07 下北沢の店



写真06右端の赤いジープの辺りから南方向を撮影 雑貨の軒下が龍馬邸になって いるのは、戦中の供出のため金 屋敷の看板を取り外した跡と思わ れる 中央の男性が薪を背負っている が、当時、雑貨は街場でも薪や石 炭で敷いていた



Oliver L. Austin, Jr., "Shinkaiyama shop". The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed November 2, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/817>

08 下北沢の商業地区・II



本通り(現一番街)北端近く 竹がサササという音で正月が近いのを願った。T1



Oliver L. Austin, Jr., "Shinkaiyama shopping district". The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed November 2, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/817>

09 文房具店



今も屋敷の「きくや」文具店の、職人 風景 店頭の取り紙に「きくや特選斜子 板書用紙」と認める 隣組生の家だったこの店先は遊び 場でした。HS



Oliver L. Austin, Jr., "Stationery store". The Oliver L. Austin Photographic Collection, accessed November 2, 2017. <http://original-collection.w2.fsa.ohio-state.edu/show/817>

※左右反転していた箇所を直した

(注) 北沢川文化遺産保存の会編/焼け遣ったまち下北沢の戦後アルバム増補改訂版(2018年10月)より転載。

年3月、複々線化が完成し、ダイヤが改正されることを機会に世田谷地区への誘客活動を企図し、その目玉である商店街、スイーツ、ランチなどで小田急線(実際には下北沢から成城学園前までの各駅と周辺地域)をテーマにした誘客イベントを開催し、新百合ヶ丘、町田地区ならびに多摩線の特に若者をターゲットに開催することを企画した(小田急電鉄, 2017)。その趣旨は、

- (1) ターゲットを「若い女性」とする。それに関わって、成城大学(当ゼミ)との連携コラボレーションをはかる。対象物はグルメ、ランチ、カフェ、世田谷みやげ、商店街と名所、スタンプラリー／ご朱印帳巡り、商品開発を推進する。
- (2) 小田急としての強みである、特急車両・改造 EXE、喜多見の車両基地を活かす。
- (3) 世田谷地区の住民、近場の区民に対するサービス提供。
- (4) 開催時期は、2018年3月(1か月間)として、オープニングイベントを開催するとともに、世田谷土産のスイーツ店による期間限定小田急イメージオリジナルスイーツ販売、協力店舗によるクーポン券発券などを商店街に依頼することとなった。

境ゼミ学生は2017年6月の企画提案を受けて活動を始め、秋から冬にかけて事前に選定された沿線の商店街・専門店に対して取材を行い写真撮影と紹介記事を執筆したものを2017年年末に提出し、「小田急線世田谷地区グルメ・スイーツスペシャル／小田急成城クーポンブック」が完成した。2018年3月の1か月間、多数の顧客が紹介店舗に足を運んだ。折しも成城学園は2017年に創立100周年を迎え、連携企画はタイムリーであったといえる(小田急電鉄, 2018a; 2018b, 毎日新聞, 2018)。

次に、2018年10月、「せたがや魅力再発見」キャンペーンが10月1日より開催!『成城大学生が制作協力』成城大学×小田急電鉄×公益財団法人世田谷区産業振興公社の連携活動を行った。2013年5月、小田急電

鉄と成城学園は連携・協力して地域社会への貢献活動を推進することを目的に、「連携・協力に関する基本協定」を締結した。今回その取り組みの一つとして、当ゼミの学生が制作協力する形で、「小田急線世田谷つまみぐいウォーキング」を実施した。世田谷まちなか観光交流協会とタイアップ企画であり、成城大学生や小田急線駅係員などが推薦する店舗を最大5店舗、自分のペースで自由に「つまみぐい」でき、5店舗「つまみぐい」を踏破した人に「新型ロマンスカー GSE グッズ」のプレゼントがある趣向である（小田急電鉄、2018c；2018d, オリコン、2018）。

以上の2回にわたる小田急電鉄と境ゼミとの制作協力は、大学における教育・研究のさらなる充実と地域社会への貢献となり、大学の知的資産発信としても重要といえよう。

3-3 成城商店街との連携活動

成城商店街振興組合（以下、成城商店街と略記）と境ゼミは2009年以來、商店街店舗の取材と記事執筆（毎月定期的に参加。日本語、英語）を重ね、「商店街 with 成城っ子」のコーナーにも掲載されてきた（成城商店街振興組合 Web）。また、「さくらまつり」の取材参加（毎年4月）、「成城街なか写真館」（毎年10月末～11月中旬）においても定期的に参加協力をしている。特に、「成城街なか写真館」は、境ゼミ生が地域イベントを見直し、従来のハロウィンフェスティバルに代わって提案したものであり、2013年より定期的に参加されて現在に至る（二子玉川新聞、2014）。

2018年11月、成城商店街からの依頼を受け、当ゼミ生は「旧山田家住宅・秋の特別公開」と「まちあるき」イベントを掛けた「成城街なか写真館特別イベント」を実施した。成城の街と商店街の昔の写真を展示し、その歴史にまつわるクイズを出題し、正解は展示写真の中に隠されており、来場客に興味を持って展示を見てもらう趣向をとった（成城大学、2018）。

旧山田家住宅（東京都世田谷区成城4-20-25）とは、米国で成功した実業

家の・橋崎定吉氏が、帰国後に米国風住宅の影響を受けて、1937(昭和12)年頃に建設したものとされている。終戦後は、一時的に進駐軍(GHQ)に接収されていた。1961年には、「南画院」(現、特定非営利活動法人南画院)の代表として活躍した画家・山田盛隆氏(雅号・耕雨)が購入して

図表3 小田急成城クーポンブック



(注) 2018年3月。

図表4 せたがや魅力再発見



(注) 2018年10月。

写真7 せたがや魅力再発見・活動風景



(注) 筆者撮影。2018年11月。

図表6 小田急成城カーボンブック＜成城学園前＞



(注)「小田急成城カーボンブック」冊子。2018年3月。

写真8 さくらまつり 成城



（注）筆者撮影。2018年4月。

写真9 成城みつ池緑地旧山田家住宅イベント



（注）筆者撮影。2018年11月。

居住した。現在、一般財団法人世田谷トラストまちづくりが管理しており、世田谷区指定有形文化財となっている（一般財団法人世田谷トラストまちづくり Web, 成城みつ池緑地旧山田家住宅 Web）。

なお、旧山田家住宅は国分寺崖線上に位置し、湧水による水辺や貴重な自然、古代遺跡などが残る「成城みつ池緑地」の一部であることから、特別保護区等にも指定されている。今後、地域と成城学園との関係をさらに深めることになろう（一般財団法人世田谷トラストまちづくり Web）。

3-4 砧地域ご近所フォーラム

東京都世田谷区砧地域～祖師谷，成城，船橋，喜多見，砧の5地区は、日本全国でも先進的な地域包括ケアの拠点であり、いつまでも安心して暮らせる砧地域を目指し、地域 住民，医療，福祉，介護，行政，各種団体の「顔の見える関係づくり」を進めていくため、2010（平成22）年より、砧地域ご近所フォーラムが始まった。上記分野に属する個人，団体が地域包括ケアの活動報告を行い，情報を共有するイベントである。その運営は実行委員会形式ですすめられ，毎年新たなテーマが設定され，各人の協力で進行する。ここまでに9回が終了した（砧地域，2019）。

筆者は2014年以来，実行委員として関わり，第9回（2019年3月）には

創造性のある まち・商店街づくりの追求

図表 8 砧地域ご近所フォーラム
イメージキャラクター「わっくん」



(注) 澁谷 翼氏 (境ゼミ出身) によるデザイン。2015 年。

写真 10 第9回ご近所フォーラム
実行委員長, 取材風景



(注) 関係者による撮影。2019年3月。

テーマ「アートでつながる心のわ ～顔の見える関係づくり～」のもとに1年間、実行委員長として活動した。第9回で特徴ある発表・展示としては、成城地区：イタル成城（通所生活介護事業部）の発表「PLAIN ART アート表現から学ぶこと」での、絵具を入れて完封したペットボトルを振ることによって創造できるボトル・アートの体験、次に、祖師谷地区：笑いヨガでは、笑いの技術を駆使して健康になる体操を参加者全員での体験があげられる。また、特別企画では「みんなで応援しよう～地域をデザインする」と題して、様々なハンディを乗り越えて活躍している4名の講演とワークショップが行われ、アートを通して地域の人と人とがハートを通わせ、交流の和・輪が広がることを目指した。

このフォーラム運営には当ゼミ学生、学園も協力しており、これまでにマスコット「わっくん」のデザイン、当日の研究発表、成城学園初等学校合唱団 OBOG（2012 年度 NHK 全国音楽コンクールの金賞受賞メンバー、西谷鐘治先生の指揮&ピアノ）による感銘深い演奏などが行われた。

写真 11 成城学園初等学校合唱団 OBOG の演奏



(注) 第8回ご近所フォーラム2018年3月，出演関係者による撮影。

4. 1945年～2020年 下北沢／成城 70年余間の変遷

4-1 世界と日本／下北沢と成城の変遷

図表9 世田谷区 下北沢／成城の変遷 1945年～2020年

| 年代 | 世界・日本 | 世田谷区 [下北沢] | 世田谷区 [成城] |
|----------------|---|--|---|
| 1945～ '1950 | ・第二次世界大戦終結 | ・空爆の少なかった下北沢へ移住 ・まちが商業化され高景気 ・闇市が発展（後の食料品市場） ・都市計画道路補助54号線が都市計画化される | ・北側商店街の親交会発足 |
| 1951～ '1960 | ・井の頭線が3両編成の運転開始 ・NHKテレビの放送開始 [1953] ・東京タワー完成 | ・努力連盟を発足、東京北沢通商店街商業組合を組成 [1953] ・井の頭線下北沢駅のフォームが延長される ・下北沢専門商店会が発足 ・映画館4館が開館 | ・南側に渋谷行きのバス開通 ・北側に街灯路新設 ・氷川神社 秋の大祭を実施 |
| 1961～ '1970 | ・東京都の人口1000万人突破 ・いざなぎ景気 [1965～1970] ・大阪で日本万博博覧会 | ・映画館数は1961～1970がピーク ・グリーン座閉館 [1968] ・北沢ファッション | ・南北統一の街灯路が完成 ・成城警察署の新築開始 ・住居表示が成城から成城1～9丁目となる |
| 1971～ '1980 | ・オイルショック [1973, 1979] | ・ピーコック全館オープン [1971] ・プラザ下北沢創刊 ・下北沢一番街商店街で歩行者天国が始まる | ・小田急線急行の成城学園前駅への全面停車実施 [1971] ・新街灯路が完成 ・労研跡地から成城までの歩道新設完了 |
| 1981～ '1990 | ・NY株式市場大暴落 ・ブラックマンデー [1987] ・バブル景気 [1986～1990] | ・本多劇場オープン [1982] ・若者のまち、カウンターカルチャーのまちとして性格が強まる | ・さくらフェスティバルの開始 [1987] ・「成城商店街振興組合」の誕生 |
| 1991～ '2000 | ・バブル景気終焉、不況に ・阪神淡路大震災 [1995] ・地下鉄サリン事件 [1995] | ・若者のまち、カウンターカルチャーのまちが確立 | ・個店の減少、大型流通店の増加の傾向が加速 ・自治会など防災会議を設置 |
| 2001～ '2010 | ・アメリカ同時多発テロ事件 [2001] ・リーマンショック [2008] | ・小田急線の清潔・浄化を求める意見、駅周辺の自転車の駐車&放置 ・下北沢大学の開始 | ・成城コルティ開業 ・(財)日本さくら会中央大会にて成城3団体で「さくら功労者」を受賞 |
| 2011～ '2020 | ・東日本大震災 [2011] ・パンデミック／新型コロナウイルスの世界流行 [2020] | ・東北沢～世田谷代田の地下化が完成し東北沢～和泉多摩川の複々線化事業が完成 [2018] ・下北沢の小田急線、京王線の各改札が分離使用開始 [2019] | ・駅前西口の交通広場の一部拡張整備工事開始 ・成城学園創立100周年を祝い、街灯に小旗を設置 [2017] |
| 2021～ '2030 | ・東京オリンピック・パラリンピック開催 [2021 予定] | | |

(注) 世田谷区編『ふるさと世田谷を語る』、世田谷区立郷土資料館、地域史などから独自に作成。

4-2 下北沢／成城の概要

(1) 下北沢まちの特性

当初、商業の中心は、現在の世田谷区北沢二・三丁目(一番街商店街)、居住の中心は代沢三・五丁目付近、北沢八幡宮、森巖寺・淡島神社分社や代沢小学校のある地域であった。起伏のある地形である。

1927年、小田急線下北沢駅が開業し、京王井の頭線も通り、駅周辺に商業地が形成され、地域の重心が移っていった。駅周辺には水田や茶畑があった(世田谷区, 2003a)。2015年から小田急線の地下化工事が始まり、都市計画道路補助54号線も着手され、駅周辺は再開発で大きく変わろうとしている。

小田急線では、快適な輸送サービスを実現するための抜本的な輸送改善策として、東北沢―和泉多摩川間において「複々線化事業」が進められてきた。1964年の都市計画決定から工事は始まり、1997年に喜多見駅―和泉多摩川駅の区間は複々線が完成、2004年に世田谷代田駅―喜多見駅の区間は複々線が完成した。世田谷代田駅―和泉多摩川駅は高架化され、踏切の廃止により周辺道路の渋滞が緩和された。同区間内の駅や高架下が整備されるなど、沿線の利便性が大きく向上した。そして、東北沢駅―世田谷代田駅の区間に関しては、地下化による複々線化計画が進められ、2018年3月に複々線化が完成したことにより、東北沢―和泉多摩川間の「複々線化事業」は完了したことになる。それに伴い、小田急線のダイヤが大幅改正となり、ラッシュ時の混雑率や遅延が改善している(マンション経営, 2020)。

下北沢は東京都世田谷区北東部に位置しており、通称「下北」と呼ばれる人口約18,000人のまちである(2017年)。

下北沢は「下北沢一番街」「しもきた商店街」「下北沢東会」「下北沢南口商店街」「下北沢南口ピュアロード新栄商店会」「代沢通り共栄会」という6つの商店街で構成されている。個性を競いながら、商店連合会が形成

されており、全体として協力体制は構築されている。ただし、現時点でまちの憲章はなく、再開発によってその制度化が必要となっている。

ファッション、雑貨を求めるショッピングのまち、劇場やライブハウスなどの文化にも溢れたまちである（インタビュー、柏・膳場・大山・大塚・小清水、2018）。

(2) 成城まちの特性

もともと山林や雑木に囲まれた高台であり、1925年に成城小学校・中学校（成城学園）が新宿区から現在の地に移転したあと、小田急線・成城学園前駅が開設されて発展した。富裕層のお年寄りが中心の閑静な「住宅街」である。成城学園に通う学生が多いため「学生のまち」「学園城下町」とも言われる。駅前周辺には、様々な商業ビルが建ち、映画の撮影にも度々使用されている（映画／動画資料、東宝、1956～1964）。人口は約23,000人である（2017年）（インタビュー、荒垣・加藤、2018）。

駅の北側は桜並木が続く重厚感ある雰囲気であるが、緑も豊富な美しいまち並みがある。一方、駅ビル「成城コルティ (SEJI CORTY)」をはじめ、様々な商業店舗が豊富なため買い物に困ることは少ない。下北沢とともに小田急線沿線にあるが、代々木上原駅で千代田線に乗り入れており、駅西口・南口からバスも出ていて交通の利便性も高い。

4-3 戦後の下北沢／成城

(1) 下北沢

1945～1955年（昭和20年代）には「闇市」と呼ばれる屋台の店が立ち並んだ。1955年～1965年には北口周辺に駅前食品市場として、魚屋「柏可津」、八百屋「福信堂」、精肉「新井屋」、裁縫道具店「スマレ」、ラーメン屋「ホームイン」などが営業され、その周辺に商店街が形成された。

(2) 成城

成城学園前駅を中心とする住宅街と隣駅には住宅が見られたが、それ以外は畑や雑木林が目立っており、道は土や砂利であった。戦災後は学園が

写真12 1960年代の下北沢駅北口



(注) 佐野 和子氏の所蔵, 1966年撮影。

写真13 1970年代の下北沢駅前食品市場
魚・柏可津



(注) 柏 雅康氏の所蔵。

写真14 1950年代の成城学園前駅



(注) 成城学園教育研究所の所蔵。

写真15 1960年代の成城学園イチョウ並木



(注) 同左。

写真16 現在の下北沢駅



(注) 筆者撮影。2020年5月。

写真17 現在の成城学園前駅



(注) 堀口 恒氏撮影。2017年5月。

あった北口側が栄え始め、イチョウ並木は当時と変わらず現存している。

世田谷区の民俗調査は、1977（昭和52）年4月の旧長崎家住宅（古民家。現、岡本公園民家園主屋）の解体調査を契機に開始された。同家園は1980年12月に開園され、同区の有形文化財第1号に指定されている。

そして、調査報告書が概報『せたがやの民俗』（1977年）以降刊行されるようになり、『下北沢』（1988）は調査報告書の7冊目にあたる。温故知新という言葉のように、民俗調査は生活、社会の将来を考える一つの材料として活用されることが期待される。本稿の「下北沢」民俗調査を担当したのは、顧問・鎌田久子氏（成城大学名誉教授、当時教授）、成城大学学部生・大学院生らを中心とする調査団（第8次）であり、特に下北沢駅前食品市場の分布は1986年時点でのもので、実査ならびに北沢・代沢の地区に在住者へのインタビューを重ねていることから信頼性も高い。

一方、成城学園前駅の周辺に関する施設、個店、商店街などの情報、マップは成城大学学生によるものであり、成城大学卒業記念アルバムに度々工夫を凝らした形で掲載されてきた。特に今回は成城学園教育研究所が所蔵している同アルバムのうち、1962年度～1981年度を調査して1981年度を選択したものである。いずれも現在では伺い知れない店名、業種、外観写真（成城）など貴重な情報である。

5. 写真ならびにフィールドワークによる分析

5-1 下北沢 オースティン博士とカラー写真

オースティン博士の撮影したカラー写真18枚について具体的に比較検証を行った。この基礎となる分析の詳細は木村孝氏「平成作庭記+α」に記載されている（木村、2016）。

01 風月堂：北口駅前から北方向〔「パン近江屋」=現・カルディのビル〕現・ピーコックの場所に花弘（生花）、小清水（喫茶）、福信堂（果物）がある。

- 02 下北沢の商店：北口駅前通り〔「近江屋不動産」＝現・佐野たばこ店に隣接する飲食店〕
- 03 瀬戸物屋：(現・一番街)本通り 宮田家具店
- 04 下北沢の商業地区Ⅰ：(現・一番街)本通り〔正面奥が「宮田家具店」〕
- 05 台所用品店：(現・一番街)本通り「稲毛屋金物店」
- 06 [無題]：(現・一番街)栄通り最北端・本通り手前
- 07 下北沢の店：(現・一番街)写真06の撮影位置から南方向を撮影
- 08 下北沢の商業地区Ⅱ：(現・一番街)栄通り北端・本通り手前
- 09 文房具店：(現・一番街)栄通りキクヤ文具店の店頭
- 10 下北沢の商業地区Ⅲ：(現・一番街)栄通り南から4分の1あたりを南方向から
- 11 下北沢の商店街Ⅰ：(現・一番街)栄通り南端(東北沢6号踏切)
- 12 下北沢の商業地区Ⅳ：現・あづま通り 現オオゼキ脇から駅南口方向に〔架線柱は「帝都線」〕
- 13 下北沢Ⅰ：下北沢駅南口駅前〔右端の「果実丸万」＝現・マクドナルド〕
- 14 下北沢Ⅱ：南口通り商店街〔現・DOCOMO・Softbankの間の横道の向かい〕
- 15 下北沢の商店街Ⅱ：南口通り商店街〔現・ミスタードーナツの角を北から〔「配給」〕〕
- 16 [無題]：「砂場」南隣の八百屋店頭〔イチゴの木箱〕
- 17 下北沢の商店街Ⅲ：南口通り商店街「砂場」南方を南方向から
- 18 サクラ画材店：南口通り商店街南端付近を北方向から〔画面奥の支柱付きの電柱の場所が膳場青果店〕

5—2 フィールドワークの結果 過去と現在の比較

A 建物

(1) 下北沢

下北沢の街は古くから長屋造りの建物が非常に多く、建物が密集している。そのため、建て替えなどが困難であり現在でも長屋造りの建物が見える。そのため道路も変わらない。また建物が建てかわらないことから電信柱の位置なども当時のままである。

(2) 成城

1960年代頃から1階建て、2階建ての両方の建物があった。まちの区画及び道路や電信柱も当時と変わっていない。建物は時代と共に建て替えられてはいるが、成城憲章（2002年制定）により、まち並みの保持に努めている。旧山田家住宅（正式名：成城みつ池緑地旧山田家住宅）には、特別保護区に指定されており、水辺や貴重な自然、古代遺跡が残っている。建物自体は洋風の寄棟造りで、各部屋で異なる壁の色、寄木張りの床が残り、約80年を経た現在でも当初の姿をとどめている。

B 交通

(1) 下北沢

下北沢は自転車に乗っている人が多く見られた。特に本通り（現：一番街）は自転車の交通量が非常に多かった。オースティン博士の写真にも映っている宮田家具店では自転車が販売されていることから、当時は自転車の需要が高かったと推測できる。

(2) 成城

1950年代から道幅が広く、当時から自動車での移動や運搬が主流。当時はオート三輪（バイクに似た乗物）があり、主に商品の運搬に利用されて

いた。現在は自動車が多く見られ、とりわけ高級車が目立つ。学生に親しみのあった成城堂書店が今年3月閉店し、敷地が駐車場に代った。駅周辺でも駐車場は増加している。

C 商業店舗の増減

(1) 下北沢

下北沢駅前には多くの商店が見られる。過去と現在を比べて、駅前では商店の増減に大差がないものの、駅周辺の住宅の一部には商店への転換がみられ、全体として商業店舗は増えている。オースティン博士の写真と現在の写真を比較すると、個人商店が減少し、大型店（フランチャイズ、ナショナルブランドの店を含む）や賃貸業の増加が明らかになった。当時から現在まで残る商店は少ない。

(2) 成城

駅前に店舗が集まり、駅から離れるにしたがって閑静な住宅地になる。東京都全住宅案内図帳（1962年）によると、今も続く店舗は多い。ただ、実業は減りつつある。

例）風月堂（菓子）、アルプス（菓子）、川上精肉店（生鮮）、季節料理 藤（飲食）など。

写真18 雑貨 東洋百貨店 下北沢



（注）筆者撮影。2020年。

写真19 スーパーマーケット・成城石井 成城



（注）筆者撮影。2015年。

当時から日々需要がある物品（米、パンなど）を販売する店舗は存続している。一方、大型流通店の進出も目立つ。

D 外観

(1) 下北沢

オースティン博士と現在の写真を比較すると、高層建物が多くなったためか、今は青空の面積が狭くなっているように見える。昔も今も、緑など木々が非常に少ない。建替え後も建物の位置は変わらず、景色全体の印象に変化が見られない。戦災を免れた地域が広範囲に残っており、電信柱の位置、坂道の上り&下りの傾斜などが現在も変わらない。

(2) 成城

当時は店先で販売する開放的な店舗が多かったが、現在は店内で販売する店舗が大半である。買物のスタイルが変化し、店先で即決するより、ゆっくり店内を見て回り、選んで買う傾向がある。1962年、1964年公開の植木等主演の映画から緑、木々が多くみられ、現在もそれが残っている。当時の派手な大看板が現在では減少した。

E 掲示・看板から見るグローバル化

(1) 下北沢

オースティン博士の写真では店の看板などに英語表記が見られる。また、当時の英語に占領軍の生活を感じることができる。現在は店先の商品・サービスの案内用掲示に多言語併記（英語、中国語、ハングルなど）を見ることができ、フィールドワークでも多くの外国人観光客に接した。彼らの目的には見る、買うだけでなく経験するも加わっている。

写真20 文具店における掲示例 下北沢



(注) 筆者撮影。2018年8月。

写真21 飲食店における掲示例 下北沢



(注) 筆者撮影。2018年8月。

(2) 成城

1950年代の写真を見ると、店舗の看板に英語が使われている。旧山田家住宅には進駐軍が住み、アメリカ人居住者も多かった。現在、店舗の看板・案内以外には、多言語化はほとんど見られず、グローバル化の傾向はあまり感じられない。成城は観光客向けではなく、居住者向けに商売をしており、グローバル対応の意識が薄い。

F 防犯・防災

(1) 下北沢

下北沢南部は地盤が弱く、商店街、住宅街とも密集しており、防犯・防災活動を強化する必要がある。最近、下北沢では振り込め詐欺が多発しているとの情報があった。かつては、地域での継続的な防犯・防災活動への参加に積極的ではなかったが、現在は月1回の防犯パトロール、夜間パトロールが実施され意識は向上している。また、まちのコンシェルジュ(案内)機能はあるものの、犯罪抑止、避難訓練、他地域との連携、防災用の貯水、避難所などの情報が明示されていない。

(2) 成城

成城の地盤は地理的に強固である。成城のまち全体の防犯・防災のため

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

に、防犯パトロール、成城地区区民防災会議、年3回の定例会議、当地区の避難所合同研修会と救命講習会が開催されている。2017年より成城学園第一グラウンドの地下に飲料水や食料などの防災用品が備わっている。現在、首都直下地震に備えての対策がなされている。

G 緑・環境

(1) 下北沢

世田谷区では、「多様な緑が笑顔をつなぐ街、世田谷」を実現するための「世田谷区みどりの基本計画」の一環として世田谷みどり33を実施している。ただ、外観上、下北沢駅周辺地域には緑がほとんど見られない。

(2) 成城

都心にありながら緑豊かな環境にあり、自然と文化が融合している。砧公園は地域住民のふれあいの場であり、2箇所の湧水地があり、動植物も豊か。仙川の桜並木は成城地区を象徴する風景として親しまれている。森山直太郎の代表曲「桜」はこの風景を見て作詞・作曲された。豊かな湧水と緑深い森が印象的な「神明の森みつ池特別保護区」は23区内では数少ないゲンジボタルや絶滅危惧種に指定されている動植物が数多く残る貴重なサンクチュアリである。

写真 22 成城みつ池緑地・特別保護区



写真 23 旧山田家住宅 成城



(注) 一般財団法人世田谷トラストまちづくり Web サイトより。 (注) 筆者撮影。2018年11月。

写真24 下北沢駅前風景



（注）筆者撮影。2018年7月。

写真25 SACRAVIA 成城



（注）同左。

H 医療・福祉

(1) 下北沢

2008年より、下北沢一番街商店街では商店街内の3箇所に、その後、しもきた商店街では2箇所にAEDが設置された。

しかし、高齢者向けの福祉サービスが特に充実しているとはいえず、地域連携も緊密とはいえない。起伏の大きい地形のため坂道も多く、高齢者にとって買物のときに住居と駅周辺との往復は楽ではない。また駅周辺に休憩所、憩いの場が多いとはいえない。結果として、若者には刺激的であるものの、高齢者には住みづらい「まち」になっている。

(2) 成城

成城地区社会福祉協議会により福祉事業の企画・運営がされており、医療・福祉は手厚い。高齢者を対象に交流会地域敬老事業「長寿の集い」や外出の機会増を目的とした地域支えあい事業である成城スポット「よりそい」などがある。日本屈指の高級老人ホームであるSACRAVIA 成城がある。2010年に地域包括ケアの先進事例となる、「砧（きぬた）地域ご近所フォーラム」が開始され、毎年開催されている。砧地域の5地区（祖師谷・成城・船橋・喜多見・砧）がひとつとなり、「顔の見える関係づくり」を目指している。

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

写真 26 下北沢・一番街
= オースティン写真 06-07



(注) 筆者撮影。2018年7月。

写真 27 下北沢・旧南口駅前
= オースティン写真 13



(注) 同左。

1 生活

人々の流行、服装や装飾等のスタイル、文化を新旧の写真を手掛かりに検証した。なお、当該項目は下北沢と成城では差異が少ないと考えられるため、下北沢についてのみ新旧比較を行うこととする。

1950年頃は、人々はロングスカート、「もんぺ」のような作業着、和服の人も少なくない。履物も下駄履きが散見される。買い物籠、風呂敷をもって歩く人が多数みられる。また薪を背負った男性の姿も見られ（オースティン写真07）、都市ガスだけでなく薪や石炭を使用していたことがうかがえる。現在は、デザイン性の高いTシャツ、スカート、サンダル、リュックに代わっている。駅前に菓子屋、生花、喫茶、果物屋などがあることは昔も今も変わらない光景である（オースティン写真01、13）。

6. インタビューならびにまち・商店街の評価・提案

6-1 下北沢 インタビュー

写真の検証、フィールドワークだけではわからない、当時の様子や商店街の賑わい、まちの雰囲気とその背景となる要因をさらに深く探るため、「全住宅案内図帳・世田谷区」をもとに、各氏にインタビューを行った（第27回経営学合同ゼミナール、2018）。

写真28 インタビュー 柏誠次・良子氏
下北沢



(注) 元・柏可津 経営者 (左2名)。
2018年7月。

写真29 きくや文具店 下北沢
= オースティン写真09



(注) 2018年7月。
写真28・29とも筆者撮影。

「元・柏可津」1947年創業 柏誠次・良子氏
「膳場商店」 膳場孝氏・ちう子氏
「しもきた茶苑大山」 大山景源氏
「きくや文具店」 大塚智弘氏 (代表取締役)
「東洋興業, 東洋百貨店」 小清水克典氏 (代表取締役)

- ・時代の変遷にあわせて販売する物品を変化させた。
「布団」「おもちゃ」から「文房具」「店舗賃貸」へ。
- ・銭湯が外食, 古着屋などに変化した。
- ・実業 (鮮魚店) から不動産・賃貸業へ変化した。
- ・劇場, 古着屋のまちに変化。時代に適応している。

茶畑は下北沢ファッションを経て, 映画館の誕生, そしてその撤退後,
本多劇場の登場, 古着屋の増加へと変化した。

6-2 成城 インタビュー

「全住宅案内図帳・世田谷区 (1962)」をもとに, 以下のインタビューを
行った。

「季節料理・藤」 加藤國廣・博子氏・小百合氏 1968年創業

創造性のある まち・商店街づくりの追求

写真 30 インタビュー
加藤國廣・博子・小百合氏 成城



(注) 筆者撮影。2018年7月。

写真 31 成城風月堂 成城



(注) 街なか写真館 開催時に筆者撮影。
2016年11月。

成城商店街と境ゼミナールとの様々なコラボレーションを実施し、商店街 Web サイトに各店舗の学生による取材記事（日本語、英語）「商店街 with 成城っ子」を掲載していることは既に述べた通りである。学生である若者が多いにも関わらず、商店街での消費は少なく、若者の力が発揮できていない。飲食など実業が中心であるが、後継者がおらず、閉店に追い込まれている店舗もある。地元の成城商店街では品質が良く値ごろのものは売れるが、高価なものは銀座・新宿・二子玉川などで買う傾向にある。個店は時代の変化に対応する努力がされている。1980年頃から実業が減少をはじめ、代わってビル賃貸業が多くなり、まちが変貌し始めた。

6—3 まち・商店街の評価

住宅地図／文献、写真、フィールドワーク、インタビューを分析した結果から、いくつかの知見を得ることとなった（第27回経営学合同ゼミナール、2018）。8つの評価項目を評価した結果は以下のとおりである。

小田急線では10分で行ける近距離にもかかわらず、下北沢と成城の地域性は対照的であることがわかった。まちの変貌速度に違いがあり、下北沢は成城より速いと思われる。また、下北沢は駅周辺に若者が多く集まり、商店街に賑わい・活気があるが、緑が少なく地元の高齢者には使いづらい

場ともいえる。これに対して、成城は緑が多く閑静な場所であり、地域包括ケアも根付いている。一方、学校と若者が多数いるにもかかわらず、駅周辺では賑わいが乏しい。下北沢と成城はお互いにない要素をもっている。

(1) 下北沢の評価シート

図表 12 下北沢の評価シート

| 評価項目 | 評価 | コメント |
|-----------|----|---|
| 建物 | 3 | 商店街の外周部には昔からの閑静な住宅がならぶ。一方、駅前には店が密集し、入れ替わりが激しい。 |
| 交通 | 2 | 駅周辺に自動車の往来は意外に多くない。歩行者、自転車の往来が中心。ゆったりまち歩きが可能。 |
| 商業店舗の増減 | 4 | 個店は減少し、大型店が増加。店舗が密集し過度な賑わい。 |
| 外観からわかる情報 | 4 | 駅周辺環境は来訪者や若者中心につくられており、以前からの居住者はそれに好感をもっていない。駅前と駅周辺の地域格差が大きい。 |
| グローバル化 | 2 | 外国人の来訪者に多言語対応がされている。 |
| 防犯・防災 | 4 | 定期的なパトロールが実施されているが、防犯、防災の装備が不十分。まち全体で変革が必要。 |
| 緑・環境 | 5 | 駅前には公共広場、緑がない。条例制定などで緑化、環境対策が必要。 |
| 医療・福祉 | 5 | 高齢者向けの医療・福祉施設が少ない。 |

(注) 達成水準の最高が1、最低が5とする。下北沢グループ（11人）の合議による。

(2) 成城の評価シート

図表 13 成城の評価シート

| 評価項目 | 評価 | コメント |
|-----------|----|---|
| 建物 | 3 | 成城独自のお屋敷が現在も残っているが、減少傾向。 |
| 交通 | 3 | 電車、バスなどの交通機関もあるが、多くの居住者が自動車を所有。 |
| 商業店舗の増減 | 5 | 昔からの個店は減少、大型店の増加が見られるが、賑わいはない。 |
| 外観からわかる情報 | 3 | 成城らしいまち並みが今も維持されている。 |
| グローバル化 | 4 | 商売上、生活上も必要性を感じていない人が多く、グローバル化の対応がやや遅れている。 |
| 防犯・防災 | 1 | 他の地域と比べて、防犯・防災対策が進んでいる。 |
| 緑・環境 | 1 | 都心にありながら、緑豊かな落ち着いた環境にある。 |
| 医療・福祉 | 1 | 手厚い医療・福祉支援が見られる。 |

(注) 達成水準の最高が1、最低が5とする。成城グループ（9人）の合議による。

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

図表 14 第 27 回経営学合同ゼミナール 資料



(注) 資料表紙より掲載，2018年9月。

6—4 評価シートにもとづく提案

(1) 下北沢

(a) 商業店舗の増減

個店の経営者が高齢化し，跡継ぎもなく店を閉じていく傾向にある。閉店後はテナント，賃貸業に転換している場合が多い。

大型店（ナショナルブランド店）に押され気味。

次世代リーダーの育成。

地元関係者，外部者，老若男女を巻き込んで新たなまちづくりにチャレンジ。

(b) 外観からわかる情報

駅前を中心に来訪者，部外者が増え，若者向けの文化が広がり，従来からの住民（高齢者が多い）が落ち着ける場所がない。駅前と周辺との地域格差も大きい。

まち全体でバランスのとれた発展，独自ルールの制定。

昔からの地元関係者と新たな参入者の間にまち意識を共有。

(c) 防犯・防災

高頻度の防犯パトロール。

避難訓練の年数回実施。

他地域との連携。

ハザードマップの告知。

水のくみ置き。防災セット常備の呼びかけ。

福祉避難所の開設。

(d) 緑・環境

駅前広場で苗木を販売し、緑化を推進する条例づくり。

公共に開放された広場の創造と活用。

演劇以外の文化施設の誘致。

(e) 医療・福祉

高齢者に優しいまちにするための提案。

電話注文でのデリバリーサービス。

自宅、施設から駅までの送迎サービス。

昔ながらの憩いの場の提供。

高齢者向け配食サービス。

身体を動かせる場の提供。

下北沢について、まち・商店街の評価と提案を総括する。小田急線の地下化と道路54号線の着手により、今後、駅周辺は大きく変貌する。現在のまち・商店街が理想を実現するために、まちの魅力や課題を意識し、まちに一体感を持たせるため協調すべきである。まちや各商店街が議論を重

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

ねながら、多世代、グローバル、多様性を重視した地域活動を実行する。
また、まち全体の新たな秩序・ルールづくりをすすめる。

(2) 成城

(a) 商業店舗の増減

学園と商店の共存，学生と店主の協働。

まちの再度のブランディング，店，商品やサービスの新たな価値，魅力の創造。

成城憲章をもとに住みやすいまちが形成されており，その意味では問題点が少ない。一方，商店街の衰退，商業店舗の減少の原因として，個店の努力不足，大型店の増加があげられる。その結果，成城の地域文化が崩れる懸念がある。

(b) グローバル化

掲示や看板での多言語対応。

まちコンセルジュ，地域特性にあった民泊の開設。

成城は，これまで商売のまちではなく，生活上の必要性も感じていなかった。

しかし，今後，一層，外国人来訪者（インバウンド）が増え，2020年のオリンピック・パラリンピック（注：世界的なパンデミックにより2021年に延期となった）もあることから，グローバル化への対応が必要となる。

成城について，まち・商店街の評価と提案を総括する。学生や若者が多いにもかかわらず，商店街での消費は少なく，若者の力が発揮できていない。従来飲食などの実業中心で発展してきたが，現在は後継者不足により

閉店が相次ぐ。賑わいや活性を拒み、若い力を発揮できていないため、富裕層高齢者と若者の多世代交流を可能にする新たな価値創造・魅力を提案し、両方を結びつけることで商店街の活性化を実現させる。またグローバル化対応もすすめる。

6-5 SDGsの視点

本調査・研究におけるまち・商店街の評価には加えていないものの、SDGsの視点も重要となっているため、今後のため一言、付言する。

2015年9月の国連サミットにおいて“2030年までの国際的な目標”としてSDGs (Sustainable Development Goals) 「持続可能な開発目標」が採択され193の加盟国によって合意された。SDGs達成に向けて、各国政府、企業は貢献していくことが期待されている。SDGsは理念に「誰一人取り残さない (No one will be left behind)」をもち貧困解決や持続的社会的構築に関わる17の目標が設定されている。この17の目標は相互に関係しており、1つの目標レベルアップは他の目標とも連動する。それを達成するためのより具体的なターゲットが合計169設定されている。2019年の日本のSDGs評価を見ると『12つくる責任 使う責任』が一番評価の低い赤(レッド)となっている(境, 2020)。

SDGsの研修用カードゲームや地方創生カードゲーム(姉妹版)を学生が体験した結果、分かったことは以下の通りである(注:当ゼミでは2019年7月、12月にSDGsカードゲーム研修を実施した)。

・経済、社会、環境、時間、お金のバランスが重要

経済/社会/環境/時間/お金すべてのバランスが大事である。経済が発展していくのとお金を集めることはそれほど難しくないが、環境や社会を整えるには自分たちの世界だけでは難しい。

・将来的な見通しをたてる必要性

時間が有限であることを意識せねばならない。将来的な見通しを立てる

ことが大事であり、未来を見据えて時間を逆算する必要が出てくる。

・まわりの国や地域との協力の大切さ

当初は自国のミッションを達成することしか考えなかったため、他国が犠牲となった。しかし、経済、社会、環境などの目標をバランスよく達成するためには、周辺国の協力が必要となる。私利私欲ではなく全体の利益になるように行動して行くべきである。

実際に全国の商店街のなかで、既に SDGs の視点を加えて活動を行っている例がある。北九州市最大の商店街「魚町銀天街」が 2018 年に“SDGs 商店街宣言”し、商店街の取組みをまとめた動画を発表し、「第 1 回 SDGs クリエイティブアワード GOLD AWARD」を受賞した。それに続き、2020 年 2 月には第 3 回ジャパン SDGs アワード最高賞も受賞した（萩原、2020）。

魚町銀天街は、北九州の玄関口・JR 小倉駅近くを起点とする、全長約 400m、約 160 店舗の商店街である。戦後復興期の 1952 年に、全国で初めてアーケードを建設したことで知られる。当時は公道に屋根を架けた前例がなく、役所の許可が下りなかったため、魚町の商店主たちは、上京して建設省に直談判し、熱意で許可を勝ち取った。進取の気風に富んでいる。「銀天街」の名称は「銀の天井に輝く街」を意味し、公募で選ばれた。その後、各地の商店街で用いられている。同組合理事長、梯輝元氏によれば、商店街を単なる売買の場ではなく、地域やコミュニティの再生と活性化の場と位置付けている。

6—6 まち・商店街に関する物語の構築

魅力ある商店街づくりにおける物語とは何かを、物語という概念から述べたい。物語という言葉は日常的に使われている。だが、「物語とは何か」という質問に正確に答えることは難しい。「大辞林第三版（三省堂）」によれば、大きく 4 つの意味が記載されている（境、2018a）。総括すると、語

ること、ある人物によって表現される情景・シーン、恋愛、人間関係ということになる。原則として目の前で起こっている現象ではなく、「物語性」を有した塊としてまとめたものといえよう。瞬間に感じるということよりは、一定期間続く関係性を振り返る文脈で用いられる。そこに物語があったことを「確かめる」作業であり、現在進行形ではなく過去を、そして「客観的な出来事」ではなく「主観的な出来事」として振り返ることもある。なぜ物語が必要か、といえば、人間の「記憶」に関わる。記憶は不鮮明になるからこそ、人は残したい、振り返らなくてはならないことを「語る」のであろう。

「忘れたくないもの」の中に物語がある。物語の特徴は「時間」「他者」「編集」の3つに集約される。物語の創造は、自ら価値のあるものを見つけ、材料を集め、目的に沿ったものを選び、それらを構築・構造化し、文章で表現し、同時にこれらの過程を常に自己評価する。その意味で、物語創造は、未知の課題解決をするため、人間の能力育成の方法のひとつとして有効であるといえ、物語創造の過程こそがアートなものである(境, 2020)。

英語で「物語」は、story, narrative の2つである。story は history と同じ起源の姉妹語にあたり、話者(著作者)が重視するのは「出来事」「何が起きたか」である。

一方、narrative は「語り伝えたい物語」「教訓」である。story は始点と終点が定まっており、固定的で話の方向性も決まっている。それに対して narrative は始点と終点、方向性がなく、そこに偶然性・意外性が生じる。

藤井聡らによる研究「『物語』に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義」では、「人文社会科学では、『物語』は人間、あるいは人間が織りなす社会の動態を理解するにあたって重要な役割を担うものとみなされてきている。」と述べられる(藤井ほか, 2011)。藤井の研究は、物語を積極的に活用する実践研究で、①臨床心理学・社会学、②経済・経営学、③民俗学、④公共計画、について適用事例の概説が述べられている(木村,

2020)。

まちづくり、商店街活性化などでは、まちづくりにかかわる人たちの語りを集めて共有した物語を創り出すことや、シナリオを作成して問題認識や問題解決の支援をすること、まちづくりに物語を活用することで人々の主体性がみられ、まち全体を多面的にみる意識の生成すること、まちのシンボルを重視したブランディング戦略、防災のまちづくり、など事例を用いて検証している。まちづくりへの物語の活用アプローチは“計画”という将来へ向けた活用という特徴である。

また、久・田中による「まちづくりにおける物語性の意義に関する考察」によると空間やまちと人間との関係性を「物語」と捉えて、物語性を生かしたまちづくりを行うためのオーラル・ヒストリーが有効であると指摘し、まちづくりにおける物語性が検討されている(久・田中, 2011)。

まちづくり、都市計画において、多くの建築家、都市計画家もまちを物語として捉え、表現してきている。地域を考察し、その地域の特性を生かし、資源を活用して魅力を発信するための企画・編集していくことはまさに物語構築と言えよう。この一つの事例としては、一般財団法人世田谷トラストまちづくりで1993年から始められた「参加のデザイン道具箱」のプログラムがあげられる。参加のデザインとは、参加型のまちづくりであり、プロセスデザインやファシリテーション方法を用いて地域住民をはじめ参加者とのワークショップを通じて、対話や未来の物語を作りあげていくものである。

地域の個性や特性から、より当該地域の持つ地域アイデンティティを高め、地域の魅力につなげていくために、いくつかの手法が考えられる。神経科学者であるダマシオ (Antonio R. Damasio) は、五感を刺激し、感動を引き起こす具体的な物語をつくる際に、「意外性」と「なつかしさ」をあげている。前者は、それまでの見方が新しい見方へ転換し、見方を変えて物事をとらえ、解決した際の解放感や感動体験を指すと考えられる。後者は

「郷愁」というよりも、物事を自らの暮らしや人生に感情的に引き寄せたり、照らし合わせたりして起こる心の騒ぎ、引き寄せた結果の、森羅万象との一体感、自己体験との照応、「大きな物語」との連帯などにより起こされる深い感動体験を指すと考えられる(境, 2017)。そして一般に、物語や事業計画書の構成要件としてあげられる, 6W2H (who, what, when, where, why, whom, how to, how much) にそって物語を創造することが可能である。物語創造の過程がアートといえるのである(境, 2020)。

一方、木村圭子は評価シートを用いて展開した提案を実行に移すために用いたPDCAサイクルとSWOT分析から、魅力ある商店街づくり計画の優先順位、実効性の確認を行い、物語展開のシステムを構築することを提案した(木村, 2020)。

- ①現状把握および現状分析：「魅力ある商店街・まちとは」として構成した8要素の評価シートを用いた現状把握を、まち歩き・ヒアリング・インタビュー等の手法を用い行う。
- ②課題の抽出：評価シートによる5段階評価で、地域特性を抽出し、SWOT分析を用いながら地域課題の整理を行う。
- ③これまでの取り組みの検証：当該地域において、現状の取り組みを見直すことにより、現状の課題を見つける。これまでの地域の課題への取り組みの取捨選択を行う。
- ④今後の取り組み：地域住民とともに協働のネットワークを構築し、専門家や行政との連携により課題を整理し、今後の取り組みのためのシステムを創る。
- ⑤新たな物語構築：評価シートから発見した魅力ある商店街づくりのためのストーリーと、これまでの取り組みを重ねることにより、地域の特性を把握し、将来イメージ、将来ビジョンを検討する。地域住民、企業、専門家、行政と関係する人々の協働により、魅力ある商店街の物語を構築していくことができるとする(木村, 2020)。

例：

- ・残された短い街路空間を活用し、パークレットの提案を行う。
- ・歩き回りながら買物ができるように、スマートな街路空間を演出する。
- ・付近にある自然（例えば溪谷）を活かして、ローカリズムの観光地回遊システムの提案を行う。
- ・商業者と地域住民が一体となって地域の演出を図り、住民と来訪者の双方に歩いて楽しめる裏道と通り抜けの活用、「私だけの発見」を可能にする仕組みを提案する。

なお中野は、わが国特有ともいうべき「住むところ」と「働くところ」、つまり住商等の都市機能の解体分離策、それは商業地の高度利用と郊外住宅地の開発を誘導した。そして自動車社会の進行がそれを支え、結果として地方部の公共交通機関の消滅危機に加え、郊外居住者の高齢化に伴い様々な課題も指摘する（中野, 2017）。

7. おわりに ～下北沢と成城 まち・商店街のまとめと展望

本調査・研究から、下北沢と成城の地域性は対照的であることがわかった。まちの変貌速度には違いがあり、下北沢は成城より速いと思われる。また、下北沢は駅周辺に若者が多く集まり、商店街に賑わい・活気がある。一方、緑が少なく地元の高齢者には使いづらい場ともいえる。これに対して、成城は緑が多く閑静なまちであり、防犯・防災対応に優れ、地域包括ケアも根付いている。一方、学校と若者が多数いるにもかかわらず、駅周辺では賑わいが乏しい。下北沢と成城はお互いにはない要素をもっており、それぞれにコミュニティもある。

来訪者、居住者の両者に心地よいまち・商店街にする。その結果、地域全体の公益が実現し、多世代共生を可能にする。大型店の進出により、ナショナルブランド化が進むと、両地域が平均化され、まちの個性（アイデンティティ）が失われる懸念がある。また一層のグローバル化対応も必要

となる。ひと、もの、かね、あらゆる資源を集めて、個性を持続することが大切ではないか。

創造性をもちつづけるためには変革・革新が必要で、地域のブランドを時代にあわせて革新していくことが求められる。不変部分と可変部分のバランス、過去から現在までの歴史＝過去の物語、に新たな展開＝未来の物語をどのように加えるか。

それには、市民、企業、行政が協働すること、引っ張ってくれるプロデューサーも必要である。場合によってはプロデューサーの育成も求められる。

<付記>

2020年に入り、新型コロナウイルス(COVID-19)は、数か月の間に世界を席卷した。これまでに流行した、SARS、MERS、エボラ、ジカ、HIVなどの感染症の流行と比較にならない速度と圧倒的な脅威をもたらした。世界中の全ての人たちに対して社会的、政治的および経済的に甚大な影響を及ぼした。海外では都市が閉鎖され、国境が閉ざされ、多数の死者と失業者を生んだ。人々の心に大きな打撃を与えた(Riney, 2020)。

今は世界の英知と科学の粋を集めて収束に向かうことを祈念するのみであるが、いずれ、新型コロナウイルスが収束した後、「ポスト・コロナ時代」に何がもたらされるか。まち・商店街はどのように影響を受け、いかに変化するか。引き続き注視することにした。

[謝辞]

本調査・研究を行うにあたり、木村孝・圭子氏、鈴木真一氏(当時、成城学園前駅長)、柏雅康氏、小清水克典氏、加藤小百合氏、鎌倉ひろ子氏、柴田真希氏(NPO法人まちこらぼ理事長)、男鹿芳則氏(一般財団法人世田谷トラストまちづくり理事長)、小田急電鉄(株)企画関係者、下北沢ならびに成城学園前の商店街関係者、砧地域ご近所フォーラム実行委員会の皆様ほか、多くの方にご協力、ご支援を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

[参考文献ほか]

○著書

Oxford English Dictionary: OED; creation, creative 語源。

境 新一 (2017) 『アート・プロデュース概論 経営と芸術の融合』中央経済社。

境 新一編著ほか (2020) 『アグリ・アート 感動を与える農業ビジネス』中央経済社。

佐藤郁哉 (1992) 『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』新曜社。

世田谷区編 (2003a) 『ふるさと世田谷を語る 代田・北沢・代沢・大原・羽根木』年。

世田谷区編 (2003b) 『ふるさと世田谷を語る 祖師谷・成城・喜多見』。

中野恒明 (2017) 『まちの賑わいをとりもどす～ポスト近代都市計画としての「都市デザイン」～』花伝社。

○研究会発表

第4回北沢川文化遺産保存の会研究大会「下北沢の戦後を語る」(2018), 世田谷カトリック教会, 8月4日。

「第27回経営学合同ゼミナール研究発表大会「創造性のあるまち・商店街づくりの追求～下北沢と成城70年間の変遷をふまえた提案～」(2018), 静岡県伊東市観光会館別館, 9月3日。

下北沢大学／地域活性化研究発表「同上」(2018), 世田谷区北沢総合支所, 9月23日。

○論文

木村圭子 (2020) 「商店街ならびにまちの新たな価値創造に関する研究—まち歩きによる評価と物語構築システムの提案」『成城大学大学院経済学論文集』第22号, 27-76頁。

久 隆浩・田中 晃代 (2011) 「まちづくりにおける物語性の意義に関する考察」『土木計画学研究・講演集』(CD-ROM), 5月。

藤井聡・長谷川大喜・中野剛志・羽鳥剛史 (2011) 「物語に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義」『土木学会論文集』F567, 巻1号, 32-45頁。

○冊子

小田急電鉄 (2017) 「世田谷地区への誘客活動 (管区宣伝費使用内容)」資料。

小田急電鉄 (2018a) 「小田急線世田谷地区グルメ・スイーツスペシャル／小田急成城クーポンブック」, 3月。

小田急電鉄 (2018c) 「せたがや魅力再発見 成城大学×小田急電鉄×公益財団法人世田谷区産業振興公社世田谷まちなか観光交流事業」(2018), 10月。

砧地域ご近所フォーラム実行委員会 (2019) 『砧地域ご近所フォーラム 2019 報告集』。

境 新一 (2018a) 「成城 学びの森 / AI 時代におけるアート&ビジネス・プロデュース — 人と機械の融合による価値創造 —」講座資料。

境 新一 (2018b) 「成城 学びの森 / AI 時代におけるアート&ビジネス・プロデュース — 物語創造手法 —」講座資料。

○記事

Riney, James (2020), OFFICIAL COLUMNIST

新型コロナウイルス後の世界を予想する(1): 逆都市化, 4月8日。

新型コロナウイルス後の世界を予想する(2): 世界は閉ざされるか, 開かれるか, 4月15日。

新型コロナウイルス後の世界を予想する(3): ついにオンライン化する教育, 4月21日。 <https://forbesjapan.com/articles/detail/33576> Forbes Japan

小田急電鉄 (2018b) 世田谷まちなか観光交流協会「会員団体の連携による小田急線キャンペーンについて」2月21日。プレスリリース

小田急電鉄 (2018d) 「小田急電鉄×成城大学×公益財団法人世田谷区産業振興公社の産官学連携! 2018年秋, 「せたがや魅力再発見」キャンペーンを開催」下北沢エリアの地元商店街や地元マーケティング企業との連携も強化! 9月25日。

オリコン 「成城大学×小田急電鉄×公益財団法人世田谷区産業振興公社【地域貢献プログラム】世田谷の“つまみぐい”を企画!」(2018), 9月29日。

<https://www.oricon.co.jp/digitalpr/29055/>

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000448.000012974.html>

木村 孝 (2016) 「下北沢今昔写真+『下北沢の戦後アルバム』の正誤表と編集後記」『平成作庭記+α』8月7日。

<http://baumdorf.cocolog-nifty.com/gardengarden/2016/08/post-9fe0.html>

成城大学 (2018) 「第27回経営学合同ゼミナール研究発表大会, 中央大学が主催〜成城大学・境ゼミナールほか3校, 優秀賞を受賞〜」9月25日。

<https://www.seijo.ac.jp/education/faeco/news/jtmo4200000nje2.html>

成城大学 (2018) 「街の魅力を発信 — 文化財特別公開イベントで成城大生が協力」11月24日。 <https://www.seijo.ac.jp/news/jtmo4200000o62l.html>

萩原詩子 (2020) 「北九州市最大の商店街「魚町銀天街」が“SDGs 商店街宣言”し、

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

第3回ジャパン SDGs アワード最高賞」2月18日。

https://www.homes.co.jp/cont/press/reform/reform_00937/

『二子玉川経済新聞』（2014）「成城の街全体が写真館に―商店街と大学連携、小田急線開通時の写真など130点」10月31日。

<https://nikotama.keizai.biz/headline/878/>

毎日新聞（2018）成城大学：「小田急成城クーポンブック」製作に成城大学生が協力！（Digital PR Platform）2月23日。

<https://mainichi.jp/articles/20180223/pls/00m/020/258000c>

マンション経営 online（2020）進む東京都心の再開発（18）「下北沢エリア小田急線地下化と駅リニューアル、カルチャー支援・住民参加型の再開発」5月13日，追記：5月16日。

<https://mansion-keiei-online.com/redevelopment/detail/id=888>

○行政調査資料

世田谷区民俗調査団（1988）「下北沢 世田谷区民俗調査第8次報告」世田谷区教育委員会。

○行政・組織 URL いずれも最新参照 2018年8月，2020年5月。

SACRAVIA 成城

<https://www.sacravia.co.jp/>

世田谷区せたがや

<http://www.city.setagaya.la.jp/kinuta/14100/14108/d00127569.html>

成城自治会

www.juken-net.com/main/areaguide/seijo/

成城商店街振興組合

<http://seijo.or.jp/>

世田谷区社会福祉協議会

<https://www.setagayashakyo.or.jp/>

一般財団法人世田谷トラストまちづくり

<https://www.setagayatm.or.jp/trust/map/pcp/index.html>

・成城みつ池緑地旧山田家住宅，2018年8月29日。

<https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/kusei/012/015/001/005/d00155452.html>

・成城商店街振興組合

<http://seijo.or.jp/>

○地図・画像資料

北沢川文化遺産保存の会(2018a)「焼け遣ったまち下北沢の戦後アルバム」, 3月。
北沢川文化遺産保存の会(2018b)「焼け遣ったまち下北沢の戦後アルバム 増補改訂版」, 10月。

住宅協会編(1962)「東京都全住宅案内図張 世田谷区」[「居宅の事実関係から調査時点は1958年と推定される。」] / 東部・北沢, 西部・成城(住宅協会: 当時: 東京都新宿区百人町2-234 電話03-368-5744)。

成城学園教育研究所の成城周辺に関する所蔵写真(1945年以降)。

成城大学卒業記念アルバム(1962~1967)「成城学園教育研究所所蔵」。

世田谷区郷土資料館(2016)「写真で見る高度成長期の世田谷1955-64」DVD版。

坂上正一(2019)『発掘写真で訪ねる 世田谷区古地図散歩~明治・大正・昭和の街角~』フォト・パブリッシング。

○映画／動画資料

- ・青柳信雄 監督(1956)『サザエさん』, 東宝。
- ・同(1957)『サザエさんの青春』, 東宝。
- ・古澤憲吾 監督(1962)『ニッポン無責任野郎』, 東宝。
- ・同(1964)『日本一のホラ吹き男』東宝。

○まち歩き／フィールドワーク

下北沢 2018年6月~7月 計4回。

成城 2018年8月 計2回。

世田谷区内の駅周辺 2018年8月 計4回。

フィールドワーク担当者: 成城大学経済学部 境 新一研究室, セミナール所属学生20名。

○インタビュー資料 いずれも2018年7月, 8月。

2018年7月

柏 雅康氏 しもきた商店街振興組合・理事長

柏 誠次・良子氏 元 柏可津 経営者。

小清水克典氏 東洋興業(株) 経営者, しもきた商店街振興組合・副理事長。

荒垣恒明氏 成城学園教育研究所 2018年。

膳場 孝・ちう子氏 膳場商店 経営者。

加藤國廣・博子氏, 小百合氏 季節料理・藤 経営者。

創造性のあるまち・商店街づくりの追求

2018年7月・8月

大塚智弘氏 きくや文具店 経営者。

大山景源氏 しもきた茶苑大山 経営者。